

〔資料〕

昭和女子大学図書館蔵『さゝやき竹』

—— 解題・翻刻・影印 ——

齋藤 彰

【解題】

『さゝやき竹』は、室町末期から江戸初期にかけて成る御伽草子である。関白殿が見初めた鞍馬の毘沙門天から授けられた姫と結ばれて幸せになる結末までにおける破戒僧の滑稽な失敗談^{註1}。姫の良縁祈願を両親の左衛門尉夫婦から請われた鞍馬寺の西光坊の老僧正が姫の美しさに心奪われ、竹竿の節を抜いたさゝやき竹で姫を鞍馬に返すようにとの偽りの毘沙門天の夢想を告げる。信じた両親は、長櫃に入れて姫を送り出す。鞍馬参詣から帰る関白殿が姫を助け出し、放牧の子牛を捉えて代わりに入れておく。僧正のもとに運び込み、子牛が躍り出て跳ね回り大騒ぎとなる。西光僧正は悪事が露見して、雷に引き裂かれて死ぬ。一方、容姿、教養ともに優れた姫は関白殿の北の方となり、若君を産み、若君は関白になり、国を平和に治めた。

昭和女子大学図書館蔵『さゝやき竹』（和九一三・四一・一三・一〇三）。奈良絵写本列帖装三冊。表紙は、濃紺色金泥草花模様斐紙。草花は、上冊水仙、中冊は小竹、下冊は梅。上・中・下段に金砂子の霞。上冊縦二三・四糎、横一六・九糎、中冊縦二三・四糎、横一六・九糎、下冊縦二三・四糎、横一六・九糎。外題は、表紙左上の朱色短冊形題簽（上冊縦一四・七糎、横三・一糎、中冊一四・八糎、横三糎、下冊一四・八糎、横三糎）に「さゝやき竹 上（中・下）」とある。内題は上・中・下冊ともになし。料紙は、斐紙。見返し布目金紙。遊紙上冊首一丁、尾一丁。中冊首一丁、尾一丁。下冊首一丁、尾無し。墨付上冊一三丁、中冊一五丁、下冊一四丁、全四二丁。中冊に三丁と六丁が入れ替わる錯簡がある。本文は一面十行。字数、毎行約

二〇字。挿絵がある。上冊二丁表の第一図、雲の内より天人が内侍所の上に天下り、笙を吹き、笛、琴などの楽に合わせている図、四丁裏の第二図、関白殿が鞠の会で見初めた美しい姫の居所を尋ねさせる図、六丁裏の第三図、満開の山桜のもと蹴鞠の会で関白殿が姫を眺める図。九丁裏の第四図、関白殿に姫が「たかまの山」と答える図、一二丁裏の第五図、六位の装束の陰陽師安倍仲範が姫のことを占う図、計五図。中冊五丁表の第一図、夜ふけ左衛門夫婦の枕上に立ってさゝやき竹で囁く西光坊の図。八丁表の第二図、みぞろ池のはたに長櫃を捨て置き、酒に酔い臥している二人の僧侶の図、一〇丁表の第三図、長櫃の姫を関白殿の馬に乗せて帰る図、一三丁表の第四図、夜半過ぎに着いた長櫃から跳び出た子牛の尾を姫の御髪と違って西光坊が飛びつく図、一五丁表の第五図、牛の子にもとの姫になるようにと祈る西光僧正の図、計五図。下冊四丁裏の第一図、横川のゆうけんが西光僧正の門外で大騒動の仔細を尋ねる図、六丁表の第二図、十二単衣に紫の桂、紅の袴の十四、五歳の恥らう姫の図、九丁裏の第三図、五位の式部の大夫の烏帽子、直垂姿の父と紫の七重襲に紅の袴を着た母と喜び合う姫君の図、一三丁裏の第四図、姫は北の政所となり、若君を授かる図、一五丁表の第五図、若君は二位の中将を経て関白になり、関白殿は四十五歳で家督を譲り、堀河の太閤となる図、計五図。三冊合計一五図。天地の雲霞は浅葱色。白で縁どる。和歌三字下り二行書。上冊一首。奥書なし。江戸前期写。野村八良旧蔵本。昭和三八年私学助成で一誠堂から購入。『さゝやき竹』の諸本は、松本隆信『増訂 室町時代物語類現存本簡明目録』（斯道文庫書誌叢刊二 井上書房 一九六二）によれば、次のようである。

A

岩瀬文庫・絵巻大一軸 「ささやき竹物語」(午・三五)

市古貞次『未刊中世小説一』(古典文庫二二 昭和三年一月)

横山重、松本隆信編『室町時代物語大成』第六(角川書店 昭和五年三月)

高野辰之旧蔵・奈良絵本一冊

B

(一) ①東洋大学蔵・写本三

②赤木旧蔵・奈良絵本 横三冊

横山重、松本隆信編『室町時代物語大成』第六(角川書店 昭和五年三月)

和五三年三月)

国文学研究資料館蔵・奈良絵本 横三冊 「ささやき竹」(九九・

八一・一一三)

新日本古典文学大系54『室町物語集上』(岩波書店 一九八九年

七月)

③北野天満宮蔵・奈良絵本・半三帖

④高安六郎旧蔵・奈良絵本 横三冊

(二) ①宝永二年鱗形屋絵入中本(国会・大東急・東大霞亭)

②実践女子大学蔵・奈良絵本 横三冊

東京大学国文学研究室蔵・奈良絵本 半三帖

天理図書館蔵・奈良絵本 存下巻半一帖

昭和女子大学図書館蔵・奈良絵本 横三冊 野村八良旧蔵^{註2}

註1 市古貞次『未刊中世小説一』(古典文庫二二 昭和三年一月) 一九頁参照。

市古貞次『中世小説の研究』(東京大学出版会 一九五五年二月) 一四三頁参

照。

2 野村八良『室町時代小説論』(巖松堂書店 昭和三年)、西沢正二「昭和女子

大学蔵・奈良絵本『ささやき竹』について」(「学苑」第五六三号 昭和六年

一月)。

【翻 刻】

『ささやき竹』

凡 例

一、底本は、昭和女子大学図書館蔵『ささやき竹』(和九一三・四一・一三・一〇三)である。

一、段落、句読点、ナカグロを加え、丁数、表・裏を表示した。

一、中冊の三丁と六丁を入れ替えて、本来の順序で翻刻した。

ささやき竹 上

そもく人わう六十二代のみかとの御時に、かんはつにて、たみこ
とくおとろへ、うれへをあけくれなげく。御門、このよし聞しめし、
それ我てうは、神代のすゑにてあくまのわさはひをなす事なし。然るに、
今世のおとろふる事は、まつ代までもまろかはちたるへし。いかはせん
と、せんしある。くきやうせんきありて、百座のこまをたきたまはん事い
かゝとそうもん^二表ありければ、此きしかるへしとて、てんたい山のさ
すに、三井寺ほうし、もろともにいのらせ給ひける。^二裏

奈良絵第一図^二表、しかれとも、かんはつやます。すてに露もふらさ

れは、野山もひとへにかれはつるゆへ、てんはくもやけ野のことく、あさましき事なり。

其後、をんかのまひをしゝんてんにておこなひたまふ。すみよし、天わうしのかくにんをめし、百廿たんのまひをはしめ給ふ。まひもなかはの事なるに、そらかきくもり、らいてん・いなつまひかり、天ちもうこくはかりなり。みかとはしめたてまつり、人々ちからをえて、ふる雨をまぢりたるところに、御てんの南二丁裏のあたりに黒雲おほひて、いきやうくにして、ひかり大きにみちけり。雲のうちより天にん、ないし所の御てんうへにあまくたり、しやうをふき、しはらくかくにそあはせ給ふ。

人々、ふしきに思ひ、こなたのかくをとめてちやうもんしけるに、かれうひんなるこゑにて、そもく、今天下にわさはひのある事別のさしいにあらず。くわんはくのせいたうあしきゆへなり。都より北、くらまのひしやもんとてあり。このかみは、天下のしゆこ神なるを、是をたにしんせさる事い「三丁表はれなしとしめし給ふ。御門をはしめたてまつり、おとろき、みすをかゝけ、かの天人をはいし給ふ。しよ人かうへをたれておかみ奉りける。てんにんは、ほとなく雲にのりてあかり給ふ。其後、うろのめくみあれば、五こくもみなり、たみもにきはひ、めてたき事かきりなし。

そのころ、二条までのこうし左衛門のせうとていやしきものあり。くわこのかいきやうめてたくして、たからにあきみちたり。しかれとも、一人の子なき事をかなしみ、ふうふ、つねに「三丁裏なけししか、ある時、くらまに参り、ひしや門に通夜して子たねをいのり、数のたからをほう殿にさゝけ奉る。」四丁表

奈良絵第二図「四丁裏 神もあはれとおほしめし、ほうしゆを給ると見て、女はう、くわいにんの身となり、すてにその月にもなりければ、さんのひ

ほたいらかなり。取あけみれば、玉をのへたることくの姫君なり。ちゝはゝよろこひ、あまた女はうたちをつけて、いつきかしつきけるに、月日にましてひかりさしそふことく、よろつけいのうにくらき事なし。殊に哥の道もたつしやなり。みる人、心をかけすといふ事なし。ちゝはゝもさるへき人をむこにとらんと「五丁表ねかふはかりなり。ある時、関白殿にまりのくわいのありし時、あたりの女はうにさそはれ、まりをけんふつありしに、くわんはく殿御らんして、かゝるうつくしきにようはうも世にはありけるよと思ひ給ひ、まりに御こゝろもうつさすなめおはしける。

かくてまりもすき、人々たいさんしけるに、関白殿、御内の将けんといふ人に仰けるは、これなる女のかへる所をよく見て参れと仰ける。うけたまはりて、しやうけん、あとをしたひゆくほとに、しやう「五丁裏けんかの女あたりによりにて、いかなる人にていつかたまで帰り給ふそととひければ、女はうはつかしけにてすきゆくほとに、しきりにとへは、せんかたなき風情にて、これは数ならぬ身也。すみ所はたかまの山とそ申ける。」六丁表

奈良絵第三図「六丁裏 左近のしやうけんはたはかりける事とはしらすして、たかまの山とはいかなる事ともしらねとも、かゝる事をしらぬていにて、又とひ返すもいかゝと思ひ、やかてたちかへりぬ。しやうけん、帰りにて此よしを申あくる。関白殿はきこしめし、あらふしきや、たかまの山と申は、かつらきの事なり。これはてんくのすみかなれば、もしけしやうのものにてもやありけん、そらおそろしなから、おもひすてんとはし給へとも、露わすれ給はねは、もしたかまの「七丁表あたりにもありける人やと、すいしんをつかはし、かつらきのふもとを尋ねさせ給へ共、まことならぬ事なれば、いよ／＼御こゝろみたれ、せんかたなくてつねは人しれすゆへ／＼にうちあたりをしひありき、かのものゝ行ゑをたつね給へとも、

しりたるものもなし。さま／＼御こゝろのをよふところ／＼をたつね給へとも、さらに行かたなし。関白殿は、こひのやまふとなりて、すてにふし給ふ。

あるつれ／＼、いやましのおりふし、こう「七丁裏とうのないしとすわうのないしとくわん白殿へおはしける。此人々は、哥のみちたつしやなる人々なれば、くはんはく殿もこのたかまの事をかたらはやと覚しめし、いかに人々、わかこのほと例ならすなやみし事、別のしさいにてなし。いつそや、まりのあそひありし時、いつくともしらす、女はうきたりしか、此女はうのあり様、まことにたとへていはんかたもなきすかたなりしほとに、しやうけんにあとをしたはせみするところに、此女はう、「八丁表みちにて、しやうけんあやしくとへは、その返事に、たかまの山といひて、いつくともしらすなり行てさふらそや、いかにわすれん思ふにつけて、いやましのむねのけふりたちまさるなりと、くれ／＼かたり給ふ。二人の内侍は、うけ給はり、扱は思ひにしつみ給ふかや。いかさまこれはまことのたかまの山の人にては候まし。都のうちにてそあるへきといひければ、すはうのなしいし、しはらくしあんして、たかまの山といふ山は、ふるき哥のこゝろなるへし」八丁裏

よそにのみ見てややみなんかつらきの

たかまの山の嶺のしらくも

といふ本哥を取ていひしと覚えたり。其ゆへは、我をなにとて尋ね給ふぞ。我はみねの白雲のことくにて、あり所もさたまらぬといはんため、たかまとはいひたり。此人は哥の道もたしか成人と覚え侍と、いひ給へは、関白殿、御悦ひにて、内侍たちに引出物給りけり。」九丁表

奈良絵第四回「九丁裏 さて、関白殿は、ないしたちの御物かたりに御

こゝろいさみ、まことにあさましくも思ふものかな。あめか下をたつねなは、いかてあひ給はてあるへきと、御心つよく、まつみやこのうちを尋ねみんとてたひのしやうそくにて、御ともの人も一、二人めしくして、みやこのかうし／＼を尋ね給ふほとに、たとへは人の家をのそき、又はみちをとる女にもめをつけ、忍ひありき給へは、みな人あやしめけるほとに、関白殿、おほしめす事、われくわん白の身として、いやしき」十丁表ものとも、かくあやしくいはれし事もひとへにみし人のためと思へは、うらむるかたもなし。夢に道行心ちして、かなたこなたとまよひ給ふか、関白殿、覚しめしけるは、まことにおもひ出したり。かゝる事は、はかせにうらなはせみはやとおほしめし、こゝにあへのなかのりといふおんやうしあり。かれか所へおはしましける。なかのり、やかて出あひ、みたてまつり、こはもつたいなき御あり様かな。いかて六るの御しやうそくにてと、かしこまる。さて、御まへにめされ、かの女の御事をくはしくかたりきかせ、いかに「十丁裏よくかんかへよと仰ける。中のり、かしこまりうけたまはり、やすき御事とて、ひみつのさつしよ取出しひらき、しはらくかんかへ申けるは、あらふしきのうらかたや。これはいやしきものゝ子なり。されともほとけのけしんにて、此むすめは、三十二さうのかたちをそなはり、心のさとき事たとへていはんかたもなし。哥のみちをまなふ事、そとをり姫のなかれをまなひ、としは十四にまかり成候とうらなひければ、関白殿、きこしめし、「十丁表けにも、としのころ、すかたのありさま、すこしもかはらす、一々にかんかへ申事、誠に天下ふさうのめいしんとて、よろこひ給ふ事かきりなし。さて、此女にめぐりあはん事をはからひてえさせよと有ければ、仲範、いよ／＼うらなひ申やう、いま廿日のうちにはおもはずあひ給ふへきといとこゝろやすけに申ければ、それはいかやうにしてあはん

そと仰ければ、仲範申やう、それふうふのえんは人けんのさたむる事候はし。たゞ仏神の御むすひにて、おも「十二丁裏はさる事にあひ給ふへし。しん／＼のうちにも、くらまのたいひたもんでんの御はからひこそとしらせたてまつる。関白殿、きこしめし、うれしくもくはしくしらする物かなとて、こかね十りやう、まきもの十ひき、なかのりに下され、なを／＼きねんよきにつかまつれ、此人にあふ物ならば、いよ／＼くんかう下さるへきとそ仰ける」十二丁裏

奈良絵第五図「十二丁裏 なかのりかうらなひをくわしくきこしめし、くわんはく殿、御心ちもはれ、清水をはしめ、山／＼へ御りうくわん申はかりはなし。中にも、くらまへこそたひ／＼の御さんろうあり。又なかのりところへ御つかひつかはし、なを／＼きねんつかまつるへきあひかなふにおいては、しよりやうをあてをこなふへし。なかのり、うけたまはり、こまのたんをかさり、いよ／＼きねんおこたらず、なかのり、こゝろのうちと思ふやう、かゝるふしき」十三丁裏の御事ありて、ふくとくのつきたるうれしきよとて、いさみてきねん申ける。中のり、たひ／＼のうらなひにも、やかて御あひ給ひて、殊さら御行多もめてたく、いよ／＼御さかへあるへしとそ申ける」十三丁裏

さゝやき竹 中

さるほとに、さゑもんのせうは、わかむすめゆへに、くわんはくととの、かくあくかれ給ふともしらす、ひめも十四になりければ、いかなるゑんをもむすひ、ひめをありつけ、世をこゝろやすく暮さんと思へ共、公卿・てんしやう人のきんたちをむこにとるへき身ならねは、とやせんかくやあら

んと、むこを定めかねあんしける。有ときふうふは、かたりける。とかくこのひめのゑんのさためは、御うちかみひしやもんに「十二丁裏なけき、御たくせんしたいにありつけんと申あへり。きちにちをえらひ、そうしやう六十七になりたまふたつきひしりをしやうしたてまつり、さしきにたんをかまへ、ひしやもんでんのほうをおこなはせ、しけんしたひにむすめをいつかたへなりともありつけんとて、ふうふも身をきよめ、ほとけの御まへにむかひて、ねんしゆしける。もとよりさいくわうはうは、けんしやたいいちのひし」十二丁裏にて、たんしやうにあかりて、とつこをもちて、れいをふり、一しちにちのいのりのしたいは、なか／＼になに／＼たとへんかたもなく、身のけもよたつばかりなりけり。むすめは、つね／＼には、人なとはなか／＼見ゆることもなかりしなりしかは、あれとたつきひしりの事なれば、何か苦しがるへしとおもひて、とき／＼たんのまへにかんきんして、打かたふきてゐたりけり。此あり「十二丁裏さまをそうしやう佛せんにありながら、しりめにかけて、是を見るに、たんくわのくちひる、まゆのけはい、ゆきのはたへのいつくしき事、いかにかゝる人々も、此世にあるやらんと思ひそめければ、いのるこゝろも身にします、かうへをうなたれて、たゞむすめのかたをのみまもりたり、そうしやう、心に思ふやう、われ、十九しゆつけのあとをおひ、三十しやうたうのほんくわんにもとつきしよりこのかた、一日「十二丁裏へんしもこんきやうをこたる事なし。すてに今七しゆんにをよふまで、しやうしけつさいの身なり。されとも、いにしへをおもふに、一代けうしゆのしやくそんは、むりやうをつこうの佛なり。然るに、しやうかくしゆせには、しやうほんふ大わうの太子とむまれ給ふ。佛しんにさへれんほの思ひはのかれ給はさるにや、いとこたいはとあらそひ、やしゆたらによをかたらひ、二世のちきりをこめ、らこらとい

へる御子いてき」六丁表たり。いかにいはんや、まつせちよくらんの我は、一しやうのらくをすて、めには見えぬらいせとやらんをねかはんも、あまりくちのいたりなり。たとひらいせはならくのそこにしつむとも、このひめに一夜のなさをかけて、ともにむけんあひ大しやうのくるしみをうけん事、二世の思ひてとなるへしと思ひけるか、ちゑふかきそうしやうなれば、夜ふけ、人しつまりて後、くれ竹のよをぬききて、二まをへたて、ふしたる」六丁裏ふうふの枕かみにたちて、さゝやきけるは、いかにやあ、さへもんの尉、ふうふともによくきけ、なんちか娘をさつけんため、此七日かあいたいのりて、われをなくさむるこそうれしけれ。かたしけなくも、我は大ひたもんでんなり。なんちかむすめをは、いそき山へのほせよ、ゑんをむすひてとらすへし。まつさいくわうそうしやうかもとへ忍ひて、あすのむまのこくに、なかひつにいらてのほせよ、もしこの事そむくならば、七日」四丁表かうちに、いゑの大事いてきなんと、さゝやきけるたくみのほとこそ、まことに才かくまはれるひしりなれと、後にそおもひ合せける。」四丁裏

奈良絵第一回「五丁表 夫婦、夢さめて、かつはとをきおとろき、うははおうちにかくとかたれは、おうちほうはおなし御つけをかうふりけるこそふしきなれ。とやせんかくやせんといひけれとも、とかくわきまへす、夜もあけ、れは、ふうふのものは、そうしやうのおはしけるこまのたんにまいりてみれば、よねんもなし体にてをこなひましますをみて、あらしやしやうやさふらふ。さやうにたゆみなく御祈りましますゆへに、今夜あらたに御む」五丁裏さうをかうむりて候と申ける。そうしやう、さてこそと心にうちに思ひ、さてはいかなる御むさうそと、とはれければ、さゝやきのことくかたりける。そうしやう聞て、御むさうはさる御事なれとも、われ

らと申は、このとしまて、しやうしんけつさいにして、さんみつのあかつきのおこなひをこたらすありし身の、いまけかるへき事おもひもよらず、たゝすぐに御たうをといひければ、ふうふは、まことゝこゝろへて、さる」三丁表御事に候へとも、とてもひしやもんでんの御しけんなれば、御てらへと申ければ、ちからなき御事なり。さらは、くそうはくらまへかへり、姫のましまさん所をしめかさりにてきよめんとて、いそきてらへそ帰り給ふ。夫婦は、むすめをちかつて、御身は、ひしやもんの給りたる子なれば、又めしあけらるへきとの御事也。かた時はなれん事をなけきしに、いまより後、又もあひみる事かなふまし。われ／＼かのちの世をよきにとふらひて」三丁裏たひ給へと、なみたとも申ける。娘も、あまたの人をきらひて、さたまるゑんもうとましく思ひしに、これはまたかくいふにをよはねはちからなくて、たゝなみたにむせひけり。さてあるへきにあらされは、さかつきとりかはし、なこりをいはひたてまつらんとて、三々九度すゝめける。さてあるへきにあらされは、なかひつに入、おとこ二人と、さいりやう一人あひそへ、この物ともにも、三々九度いはる、さけをすゝめければ、思ふほとゑい」七丁表つゝ、なかひつをかきて、たとる／＼と出にけるか、いよ／＼ゑひにみたれ、こゝにてはやすみ、かしこにてはうちおとし、やう／＼みそろ池のあたりまで行ほとに、あしもたゝす、めも見えされは、まつしはらくやすみてゆかんとて、なかひつを池のはたにすて置、三人のものとも、せんこもしらす、ふしたる也。」七丁裏

奈良絵第二回「八丁表 かゝりける所に、関白殿は、はかせのをしへのことく、れい佛れいしやの御めくみをあふき、いかにもして、かの姫をあひみてしとおほしめしける。その日はくらまへ参り給ひ、天下のまつりことを祈り、又わか身の思ひをはらし給へとときせいし給ふに、日もせいさんに

かたふきければ、むまのりてけかうし給ふに、みそろ池のはたになかひつかきすへ、前におとこ三人ふしたりけり。あやしくおほしめし、たちよらせ給ふに、なかひつの中に「十裏人のいきさしきこえけり。ふしきなりとて、さこんをめして、此ふたあけてみよとの給へは、かしこまりて、ちやうをねちぬき見るに、日もくれかたなれば、かたちはさたかに見えねとも、女一人、中にあり、左近、おとろきて、しかくのよしを申ければ、よし、なにものにてもあれ、つれて行へしとて、めしたる御むまにのせ、御身はかちにてかへらせ給ふ。左近のしやうけんは、女はうのかはりに、のかひのうしの子を」九十表とらへてなかひつに入、もとのことくふたをして、さらぬ体にてかへりけり。」九十裏

奈良絵第三回九十表 女はうはなみたにくれて、いかなる御事にやとあしつゝ行ほとに、ほとなく二てうの御所へ入給ふ。かくて、そうしやうほうは、かやうの事はしらす、てし・とうしゆくをちかつけて、我、ふしきのまれ人をむかへ申なり。しやうしんのしたてはつねの事、こよひはさんかいのちんふつをとゝのへ、まれ人をなくさめたてまつれと申されければ、もとよりほういちむさんのわかとうしゆくとも、つねにたしなむ事なれば、いろく十裏のうを・鳥などをとり出し、うつら・ひはりのひしを、あゆのしらほし、めんくののちまんとて、そうしやうにたてまつる。よろこひ給ふ事かきりなし。急きこしらへとて、きやうつくゑなどにて、うを・とりをつくり、まれ人をいまやくとまぢゐたり。そうしやうも、時をさためてさやくきたる事なれば、おそき事ふしきやおほしめし、もしくわいはるかに出て見給へ共、見えさりけれ。すてに入あひのかねもなり、はや夜半はかりに成たり。」十二表かのおとこもは、ゑひやさめけん。こはいかに、よもふけなんとおとろき、いそくほとに、寺にもつきしかは、

もんほとくとたく。うちには待かねたる事なれば、そうしやうと御弟子のほうと、なかもちをかきて、佛前のわきにかきすへをきけり。そうしやうは、たゝゑみにゑみて、三人のものにも、ひきて物ことくしくとらせ、かへりぬ。とうしゆくともをもしつめ、そうしやう、なかもちのまへにかゝり、ふたをあくるもおそしと思ひけん、十二裏いかにきうくつにやおはすらんといひながら、ふたをあげ給へは、うしの子とひいて、はねまはるほとに、ともしひもけちらかし、仏せんのせうしなとをけちらかしかる。そうしやう、こはいかにとよるところを、ふみこかされて、たちあかり、さりともしひめのおほしめすとをりをかたり給へとて、めをふさき、いたきつくとおもへは、うしのをにとりつき、これはひめの御くしそともひかまへて、あまりはねたまは、御くしのぬけたまはんそ。しつ十二表まりたまへと、こゝゑになりてとりつけは、いよくはねられ、そうしやうは、たゝゑきれてたちたりけり。」十二裏

奈良絵第四回十三表 あけくは、しやうし一ほんふみやふり、はうちやう・めんさう・こまのたんともいはす、まはりければ、いやくこれは人にてあらし。きしんのいかりもかくやらんと、弟子・とうしゆくもめをさまし、てんてに火をともしみれば、くろきうしの子ひとつあり。よりあひ、とらへて、らいくわうはしらにつなかせ、そうしやうおもふ、姫のうしの子にけんしたると思ひ、いま一たひ、もとの姫君となりたまへと、しゆすをし十三裏もみ、いのりけれとも、なにかはうしの人になるへき、その時、そうしやう、てしのほうをよひ、此たひは二人していのり、そもく、御身は左衛門のひとり姫なるに、かくあさましくみゆる物かな。いかなるあくりやうのしわざなりとも、そうしやうかほうりきつくへきかと、せめにせめて、祈りければ、うしの子は、いよくはねてくるへは、

せいたかの二とうし、けんしやのいとくをみせ給へとて、又こそいのり給「十四丁表ひける。そうしやう、なみたをなかし、ひころ、とふ鳥も祈りおとし、地をはしるけた物までも、けいはくのゐんをむすんければ、さらにはたらく事なかりしに、かくある事もいまほんのうにをかされて、此うし、もとの姫になさぬ事のくちおしさよと、さりながらあまりくたひれたるに、すこしやすみ申さんとて、うちまところめは、よはほのくくと明たりけり。」十四丁裏

奈良絵第五回「十五丁表　さいくわうはう、せんかたもなく、おもはれけるは、我、日比、あまりにきやうりきたつして、しよにんにたつとまれけるまんしんを、ましやうさはりとなりたるとおほえたり。此事、人にしらすな、いかさまにこゝろをしつめ、いま一度いのる物ならば、もとの姫にしたて、ちきらん物をと、猶もあくしんおこさるゝ僧正のこゝろさしこそおかしけれ」十五丁裏

さゝやき竹　下

然るに、たかいふともなく、みなみ谷の西くわう坊には、左衛門のひとり姫かうしになりたるをいのれとも、いまた人にはならぬといひ、そのあたりのものともあつまるほとに、なん女ともに、うんかのこくみたれ入その中に、をとけものゝありて、めんさうに入、つなきてありしうしの子を引出し、これよといひければ、人々、いちにとつとわらひければ、大地もひゞき、しんとうす。其聲、きふね・せれう・かも・市原・やせ・やふさと・さかりま「二丁表つ・ひゑまで聞えければ、くらまにこそ事の出きたれ。我さきにはせあつまる。よろひ・はらまきかため、馬に乗たるむ

者もあり、かちたちの人もあり、思ひくゝのとうくにて、われをとらしとよせくれは、ほとなくくらまのたに、こまのたてもなく見えたりけり。さて、こゑくゝに申やう、いやなに事にもなしといふかたもあり。いや、これは、そうしやうの左衛門かむすめに心をつくし、そのはちなるといふ「二丁裏人もあり。左衛門かむすめのうしになりたるを、そうしやうの祈るとて、うしにはねられ、僧正のわつらひ給ふといふかたもあり。とりくゝにいふほとに、人々しつまる事なくありしに、その中に、よかかわのゆうけんとして、さんたう一のおく僧あり。たとひなに事にもあれ、此大勢うちましり、むけに帰るも本ゑなし。さいくわうはうにあひて、事のしさいを尋ねんに、人々そのけとて、大なきなた「二丁表さやはつし、馬に乗、大せいの中をのりわけ入けるか、すは事こそ出さけるほとに、かたはらには、はきとらるゝものもあり。又さいしをうははるゝものもあり。いさかひと見えたりける所も有。なくこゑすれば、かたはらにはわらふこゑも聞ゆれば、なにのわかちもしられず。さて、ゆうけん、さいくわうはうのもんくわいにこま乗すて、ねりへいのうへにはねあかり、大をんあけていふやうは、いかに、さいくわうはうにはなにことの「二丁裏出き、かやうにさはかしくやさふらふ。山々の人々も、残らずこれへはせあつまるとは申せとも、更にことのしさいをきかねは、これて日をくらさん事もいかゝ也。出てくはしく申させたまゑ。かく申ほうしは、よかはのゆうけんなり。すこしもあやまちあらは、てなみをみせんと申されたり。そのとき、さいくわうはう、佛たんの下よりふるいいて、なきなたつえにつき、ゆう「三丁表けんにあひて、かゝるふしきの事こそ候はね。人々あつまり給ふ事にてはなし。此しさいと申は、二条の左衛門と申人の娘、よのまにうしとなり侍れば、ちゝはゝかなしみて、われに祈かへしてえさせよといふ

まゝに、このやまのほせたり。かやうのものは、せめて三七日も祈てこそしるしもあるへきに、かくさはかしく候へは、をこないもならず候。とくく「三丁裏ゆうけん、きゝて、けにさもあらしとて、はせまはり、此よしいひきかせければ、各々しつまり、ひき給ふ所に、さるおとこ、すゝみ出て申やう、いかにさいくわう坊、此うしは、市原のなにかしかうしなるか、きのふのくれほとに、いつくともなくうせ、こよひはよすから、かなたこなたをたつねつるに、こなたへ給はれとて、やかて引て帰りける。」四丁表

奈良絵第一回「四丁裏 人々、これをみて、又とつとそうちわらひ、よし／＼に事にてもある、いつまでこれにあるへき。たゝひけやといふまゝに、みな／＼いゑちにかへりつゝ、さてこそ西光坊かあしきをこなひあらはれたり。くらまのはう中あつまり、此うへは、さいくわうはうそのまゝにてをくならば、山のなをりとなるへし。いかゝはからはんといひある所に、かみなりさはき、雨ふりて、しんやのこことく「五丁表なりけるか、さいくわうはうへらいてんおちて、そうしやうをつかんであかるとみえて、そらはれてける。誠におそろしさ申はかりもなし。そのゝち、そうしやうを山のをくに杉の木すゑにくた／＼にひきさきてかけてそをきたり。それより、そうしやう玉しる、あくまのけんそくとなりけれとも、をこなひおきたるみちにひかれて、山のしゆこしんとなり、今に僧正か谷と申なり。」五丁裏

奈良絵第二回「六丁表 さるあいた、関白殿は、かゝるふしきの事かな。

中のりかうらなひしも、かりそめにあはん、ことさらひしやもんをしんせよといひたりしか。もし此人にてもやあるらんと、火をとませて御らんすれば、うたかふ所もなき、としころおほしめしたる人なり。御しやうそくには、十二ひとへにむらさきのうちき、くれなるのはかまをふみつゝみ、

いまた十四、五の姫君のはつかしけにうちそはみたる御「六丁裏風情は、ゑにうつすとも、筆にもいかてをよふへき。かゝるめてたきひしやもんの御りしやうかなとかんるいきもにめいしたり。扱、くわんはく殿は、御あたりへよらせ給ひ、御身しらすや、われ、とし月のもの思ひ、いつそや御身しよにて、まりのあそひのありし時、一めみしより、こゝろならず御身のゆくゑをたつねさせければ、たかまの山とありしことの葉のすゑたつねかねて、とし「七丁表ころくらまの大ひたもん天に祈りししありて、ふしきにあふ事のうれしさよとおほせければ、その時、姫きみは、すこしよろしく見えければ、さて、御身はいかなる人のむすめなるぞ、くはしくならさせ給へ。さためてちゝはゝもなけき給はん事もいたはしければなとゝ仰ければ、ものをいはて、忍ひのなみたはかりとみえ給ふ。その夜もよもすから、ひよくのちきりあさからす、」七丁裏かたりあかし給ふ。夜も明けければ、くわん白殿、あまたの女はうたちをそへ、かしつき給ふ。まことにきよくらう金てんの御すまい、めてたき御事かきりなし。其後、関白殿、姫君に仰けるは、とてもなかききりの末、いまこそつゝませ給ふとも、ついにしらてあるへきか。さうそちゝ母なけき給はんとありしかは、その時、姫君、今はなにをかつゝみ侍らん。わらはゝ、いやしきものゝ子なるゆへ、いつそやみうち「八丁表の人のたつねし時もたゝなにとなくたかまとはこたへ侍れ、はつかしくさふらふ。をなしくは、人しれすふるさとへかへし給ふへしと申させ給へは、くわん白殿、きこしめし、よし／＼、いかなる人の子にてもくるしからすとの給へは、扱は申さてかなふまし、二てうまてのかうしに、ちゝは左衛門のせうと申もの也とて、はしめより今までの御事ともくはしくかたり給へは、関白殿は、きこ「八丁裏しめし、扱はひしやもんにての申子なれば、此たひもひしやもんの御ひきあはせ、取

わきめてたき契りとて、いよ／＼かた時はなれしとかしつき給ふ。」九丁表

奈良絵第三図「九丁裏　さらは、ち／＼をいそきめせとて、かたしけなくも、くはん白殿より、てんしやう人を御つかひにてめされける。左衛門のせうは、姫をうしなひ、なげきかなしむをりふし、かくときくより、ち／＼のうれしさとへんかたもなし。いはひ申にをよはず、御つかひと／＼もなひ、ち／＼はまいりけるか、むくはんのものは関白殿御まへちかくは参らねは、やかて左衛門は五ゐの式部のたゆふになされ、ゑほし・ひた／＼れちやく」十丁表し、は／＼は又、いつしかきもならはぬむらさきの七かさねに、くれなゐのはかまきせ、御まへにいたしける。姫きみ、たいめん有、たかひによるこひ給ふ事かきりなし。くはん白殿、仰には、此たひの引出物には、みやこの御たいくわんを給はりける。めてたき御くわほうとうらやまぬ人はなし。かくて、くはんはく殿、此姫のつほねをかた時もはなれ給はぬを、かたへの人／＼そねみ、かくいやしきものゝむすめ」十丁裏におもひかへられし事よなと／＼いひあへり。人々申けるは、いかさまみめ・かたちこそめてたくとも、よろつをかしき事のみあるへしとさ／＼やきあへる所に、うちより関白殿めされければ、やかてさんたいある。人々申けるは、よきひまなり、いさや、此姫君のありさまくはしくみまいらせんとて、ひめ君の御つほねへ人々まいり給ひ、いかにさひしくおほしめさん、今よりは「十二丁表たかひにつれ／＼をもなくさまんため、人々まいり侍とありければ、姫君は、こなたよりこそなと／＼、た／＼おほかたの御ものかたりともありけるに、人々、つれ／＼に、くはんけんのはしめんとかたり出し給へは、こたへて御物かたりくはしくあり。又うたのみちをたつね給へは、くらからず、人々もた／＼人とは思はず、それよりたかひにそねむ事こそなかりける。今は関白殿の北のまん」十二丁裏所とあかめける。めて

たき御おほえなり。此事みかときこしめし、いろ／＼の御うたのたいともくたりけれとも、一首も残るところもなく、よみ給ふ。事さら筆のあとのいつくしさよと、みかと、ゑいらんまし／＼、御おほへいよ／＼めてたし。くはんはく殿、めてたくおほしければ、これひとへにくらまの大ひたもんでんの御まほりとおほへたりとて、くらまをこんりうして、あまたの「十二丁表しよりやうをつけ給へは、くらまほうしは、よろこひ申やう、さいくわうはうのあくしんは、やまのはんしやうのもといなり。これ大ひたもんでんのはうへんなり。されは、くわんはくとの、すゑ／＼までもめてたく、いよ／＼山／＼寺々をもこんりうありければ、北のまんところ、た／＼ならぬ御事にて、やかて十月と申に、御さんのひほもたいらかなり。しかもわか君にておほしける。ほと」十二丁裏なく又わかきまうけ給ふ。めてたき事ともなり。」十三丁表

奈良絵第四図「十三丁裏　わか君十五のとし、けんふくありて、二位の中将殿とそ申ける。関白殿は、四十五にて、御子の中将殿に家をゆつり給て、御身はほり川の御所をしつらひて、きたのかたもろにもにすませ給ふ。堀河の大かうとてあかめたてまつる。中将殿は、関白になりて、天下を納め給ふに、まつりこといみしくまし／＼て、たみのかまともにきはひければ、国のなひきしたかふ事、申はかりなし。御おとうとたちも、「十四丁表な／＼てんしやうし給ふ。か／＼事をみるにも、た／＼しんをとり給へ、かくめてたくさかへ給ふとも、くはんはく殿、くらまの御てら、いつれもれい佛れいしやを御こんりうのゆへなり。又さへもんの、くわんはくをむこにとりて、さかへ給ふも、わかき時より、しん／＼ふかきゆへなり。めてたし／＼」十四丁裏

奈良絵第五図「十五丁表

【影印】

『ささやき竹』

ささやき竹
上

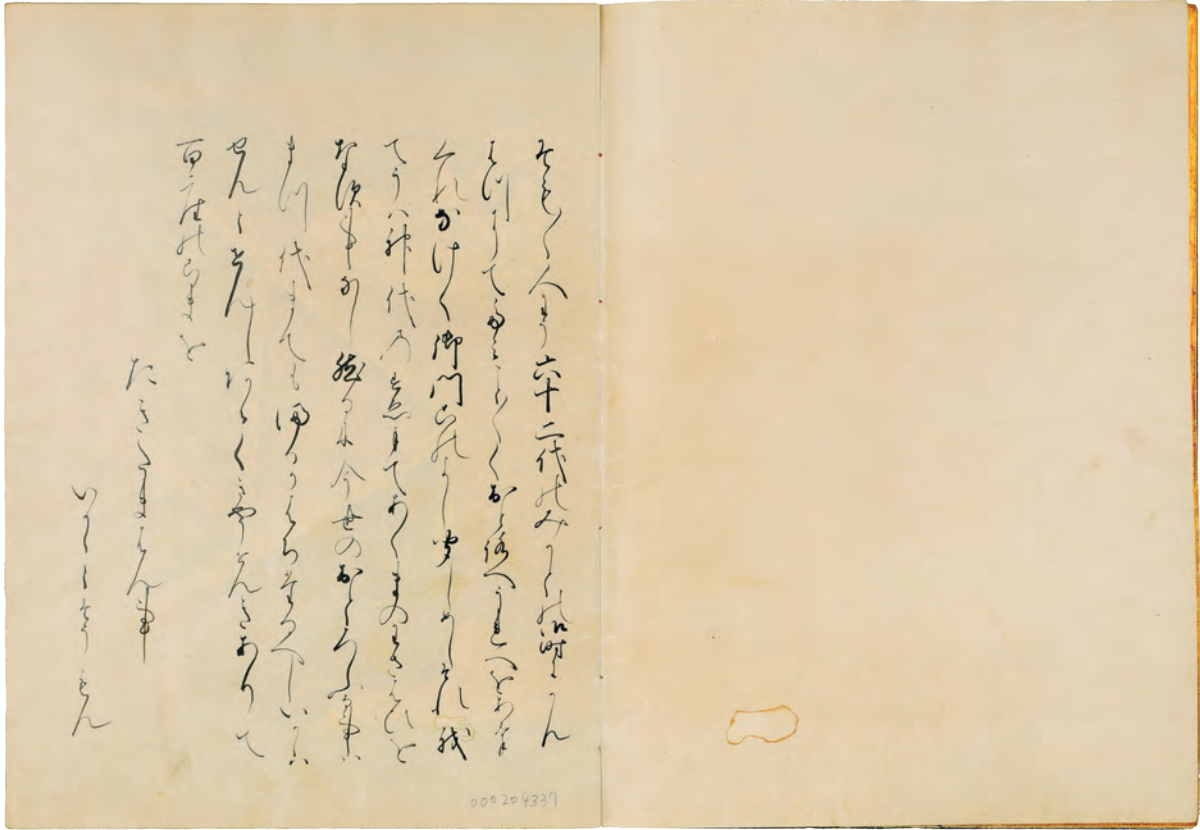


上冊 表表紙



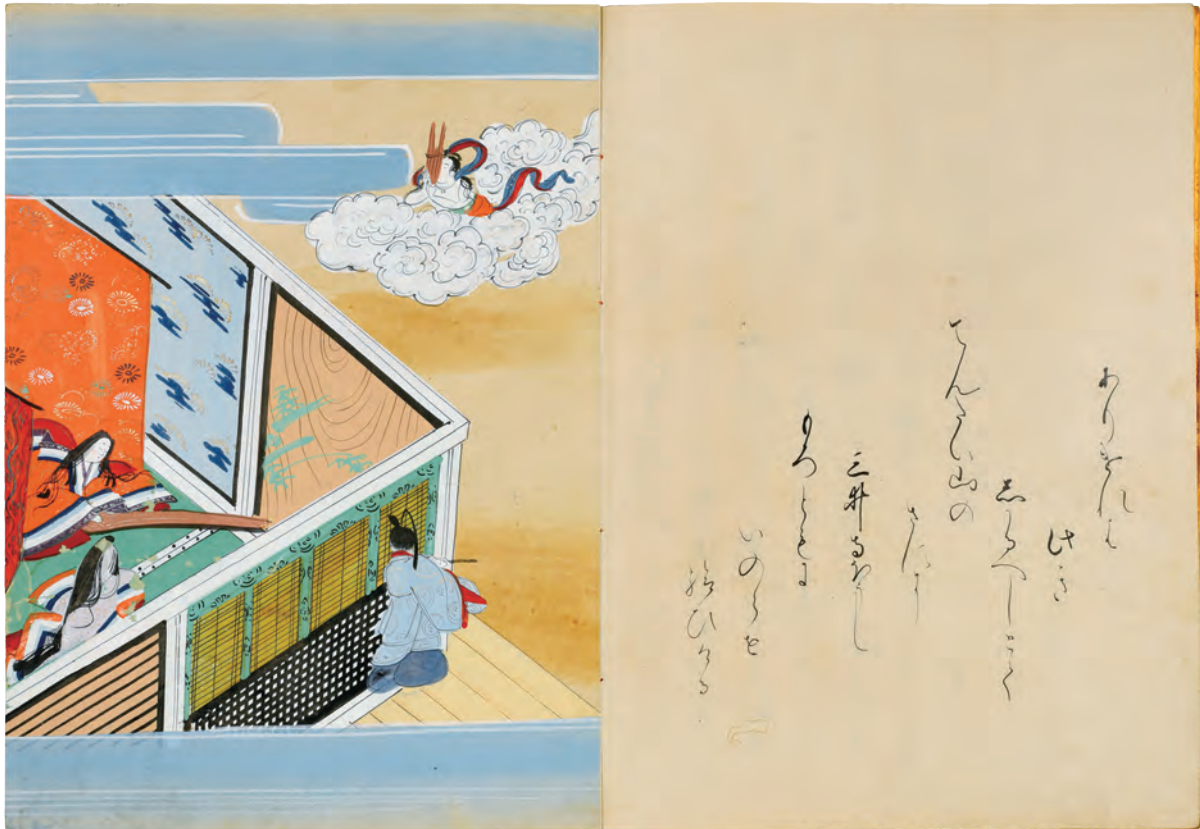
上冊 首遊紙表

上冊 表表紙見返し



上冊 1丁表

上冊 首遊紙裏



上冊 2丁表 奈良絵第一図

上冊 1丁裏

ねとれいやくんへむしりたるすくぢ
 けりたぬり山いりまらまらと
 ととれまらとあつねいふまら
 とりてとあひやうとらりねやま
 御りくげいりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 さのまらりりりりりりりりり
 とりりりりりりりりりりりり
 とりりりりりりりりりりりり
 のりりりりりりりりりりりり

上冊 7丁表



上冊 6丁裏 奈良絵第三図

けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり

上冊 8丁表

けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり
 けりりりりりりりりりりりり

上冊 7丁裏

ようなれんておれんてうらさの
 たまの山の歌のちうくと
 こいふ奇とれくつひくとえとつりとも
 我とよかしてあひうふを我とよひの白
 此とくちてあらねとさささうねといふ
 たまといひのちりけくつあれれとて
 人と若く坊といひのうへ実白飯の怪い
 因縁とつりかた地ほり
 まり

上冊 9丁表

こりめくしやんちやうとくえいの
 西のうたうまの山といひつりて
 あたりひつりてやいふまをれんて
 うつりてつりてうひのちりて
 まさまりとれくつりてうひのちり
 るとつりてつりてつりてつりて
 さふいひのちりてつりてつりて
 まつりてつりてつりてつりて
 とつりてつりてつりてつりて
 此とつりてつりてつりてつりて

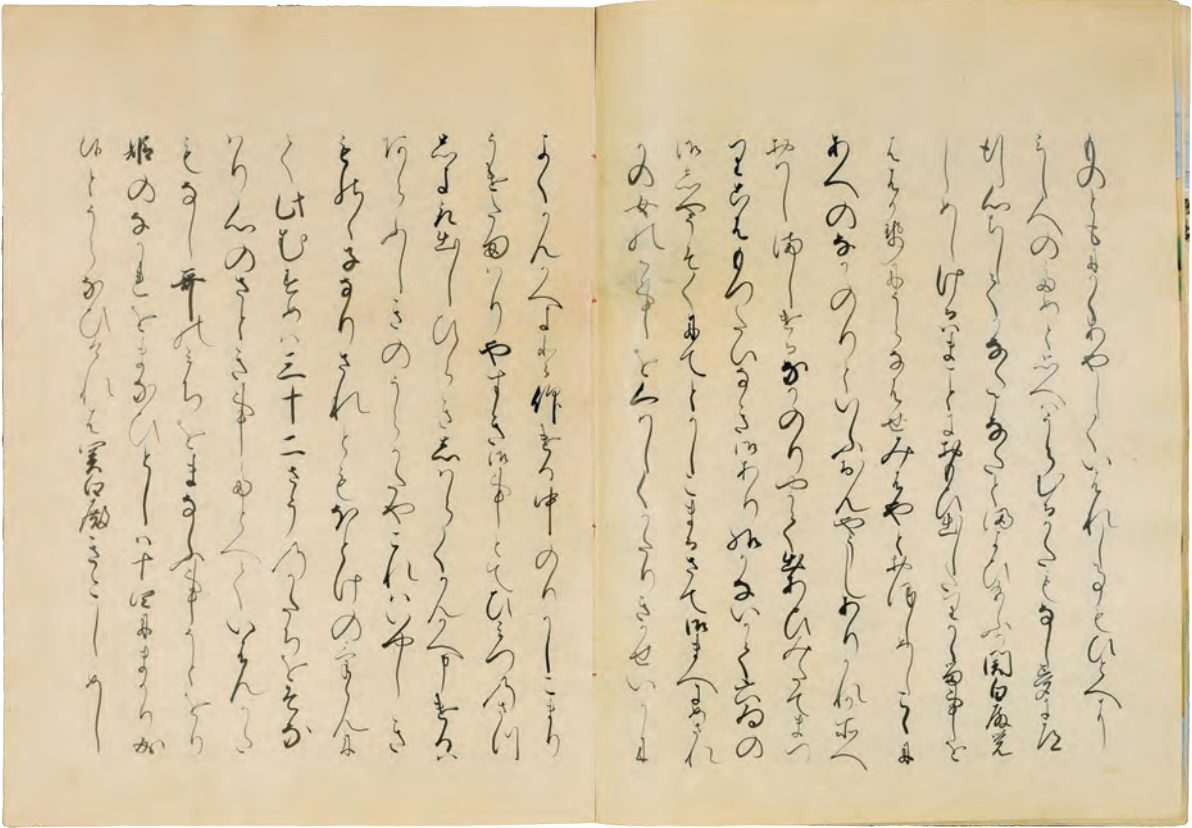
上冊 8丁裏

りて開白飯のちりてつりてつりて
 いさつりてつりてつりてつりて
 われつりてつりてつりてつりて
 食つりてつりてつりてつりて
 んとつりてつりてつりてつりて
 一人つりてつりてつりてつりて
 まつりてつりてつりてつりて
 ことつりてつりてつりてつりて
 ちりてつりてつりてつりて
 めつりてつりてつりてつりて

上冊 10丁表

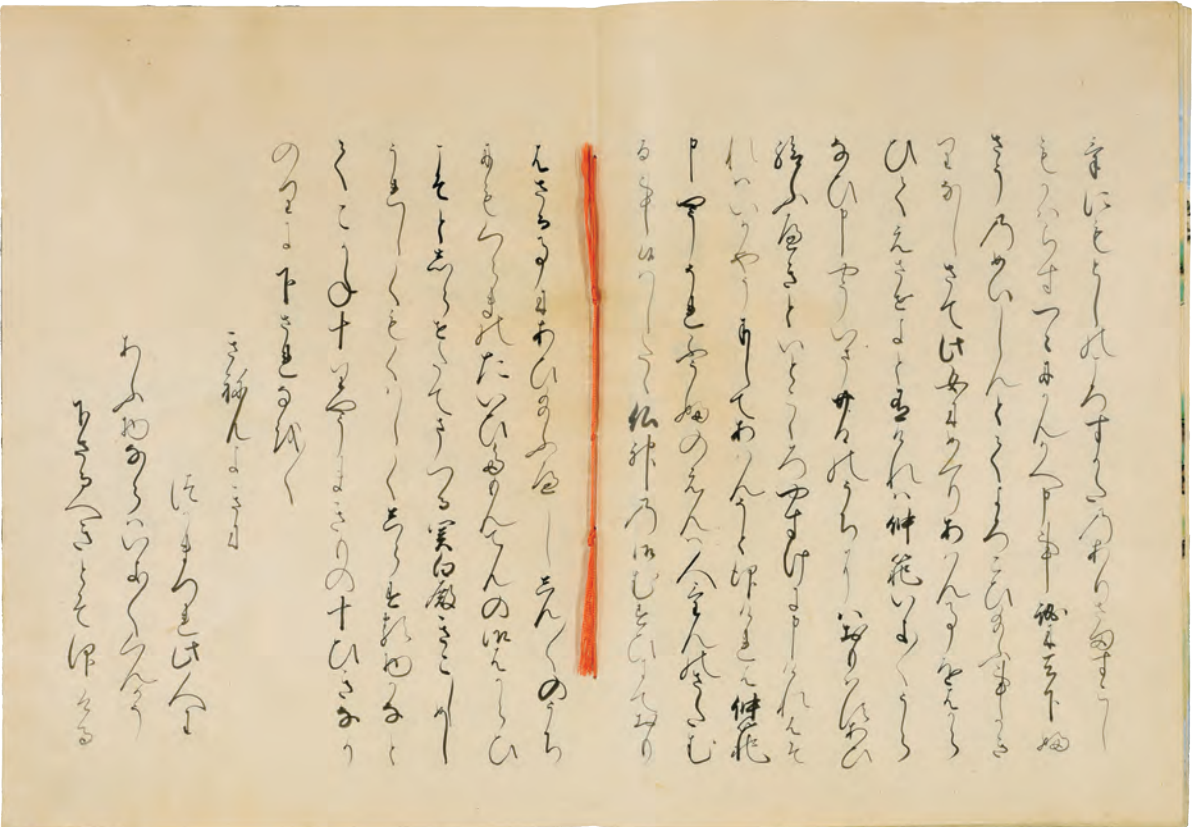


上冊 9丁裏 奈良絵第四図



上冊 11 丁表

上冊 10 丁裏



上冊 12 丁表

上冊 11 丁裏

おうのとうとうまひとてま〜く〜
 り〜ん〜夜はらり〜る〜水とこ
 ー山〜(心)〜ん〜
 中〜く〜(心)〜ん〜
 たり人まのり〜(心)〜
 あげ〜ん〜
 ー〜ん〜
 ー〜ん〜
 ー〜ん〜
 ー〜ん〜

上冊 13丁表



上冊 12丁裏 奈良絵第五図

のい〜り〜
 さ〜ん〜
 ー〜ん〜
 ー〜ん〜
 ー〜ん〜
 ー〜ん〜

上冊 尾遊紙表

上冊 13丁裏



上冊 裏表紙見返し

上冊 尾遊紙裏



上冊 裏表紙



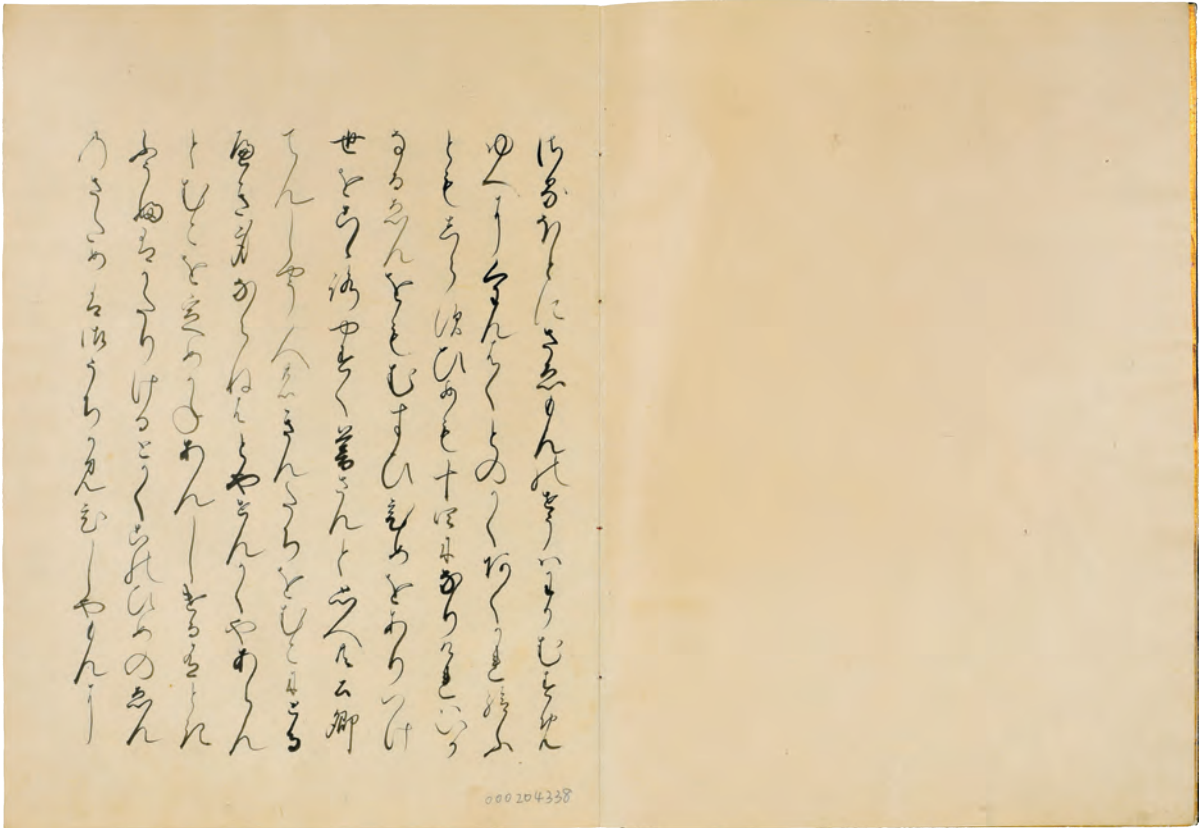
さ
よ
き
竹
中

中冊 表表紙



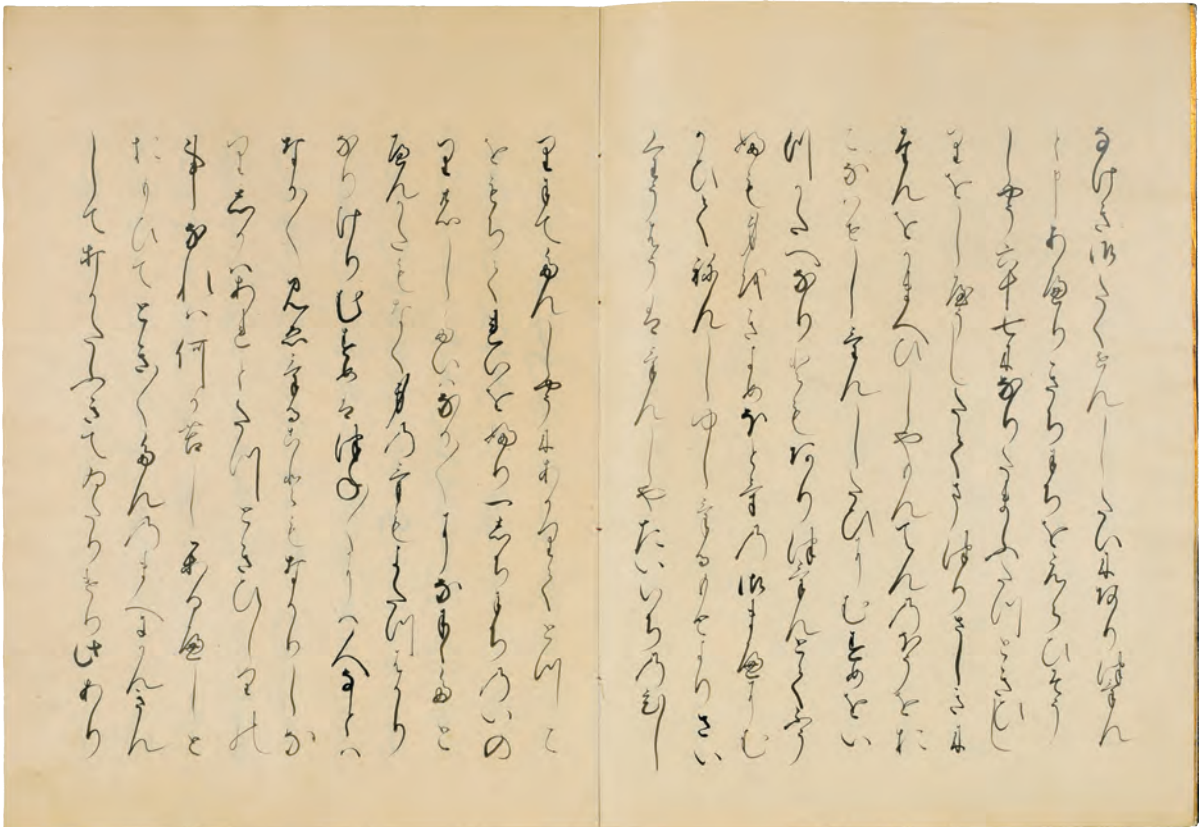
中冊 首遊紙表

中冊 表表紙見返し



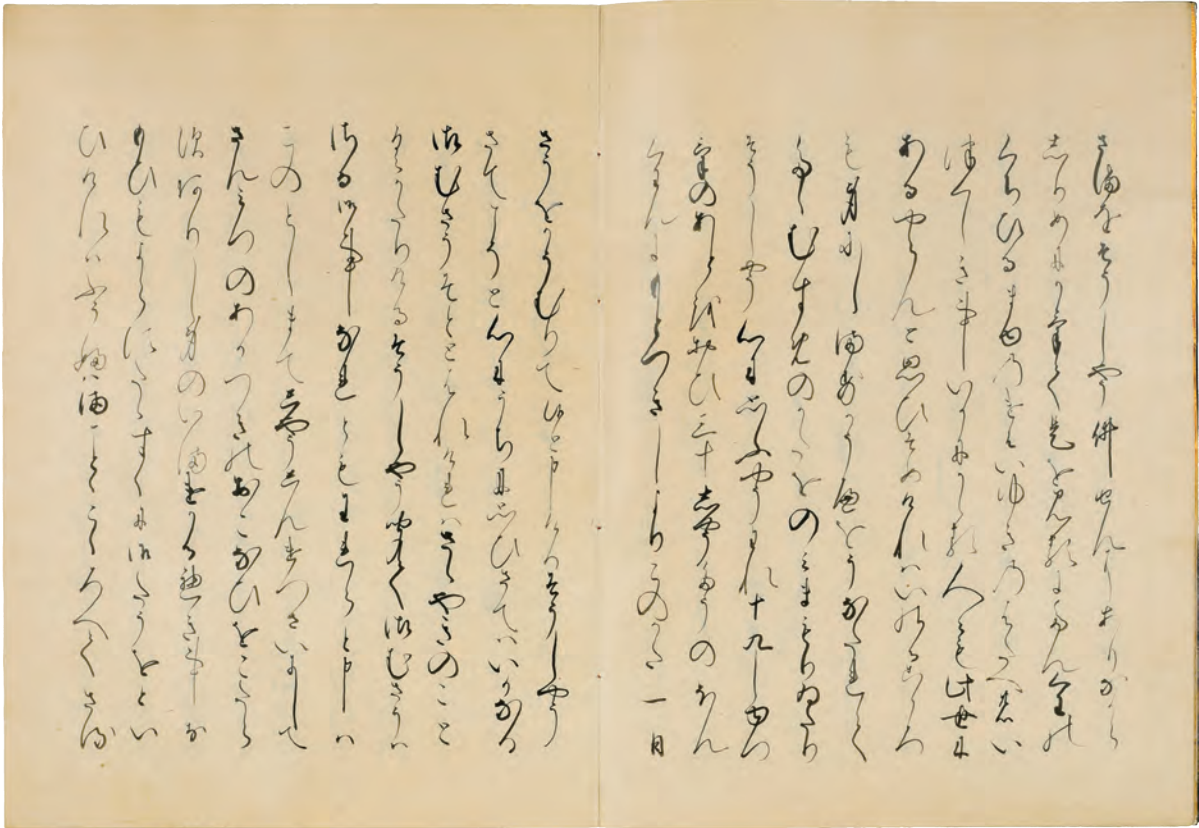
中冊 1丁表

中冊 首遊紙裏



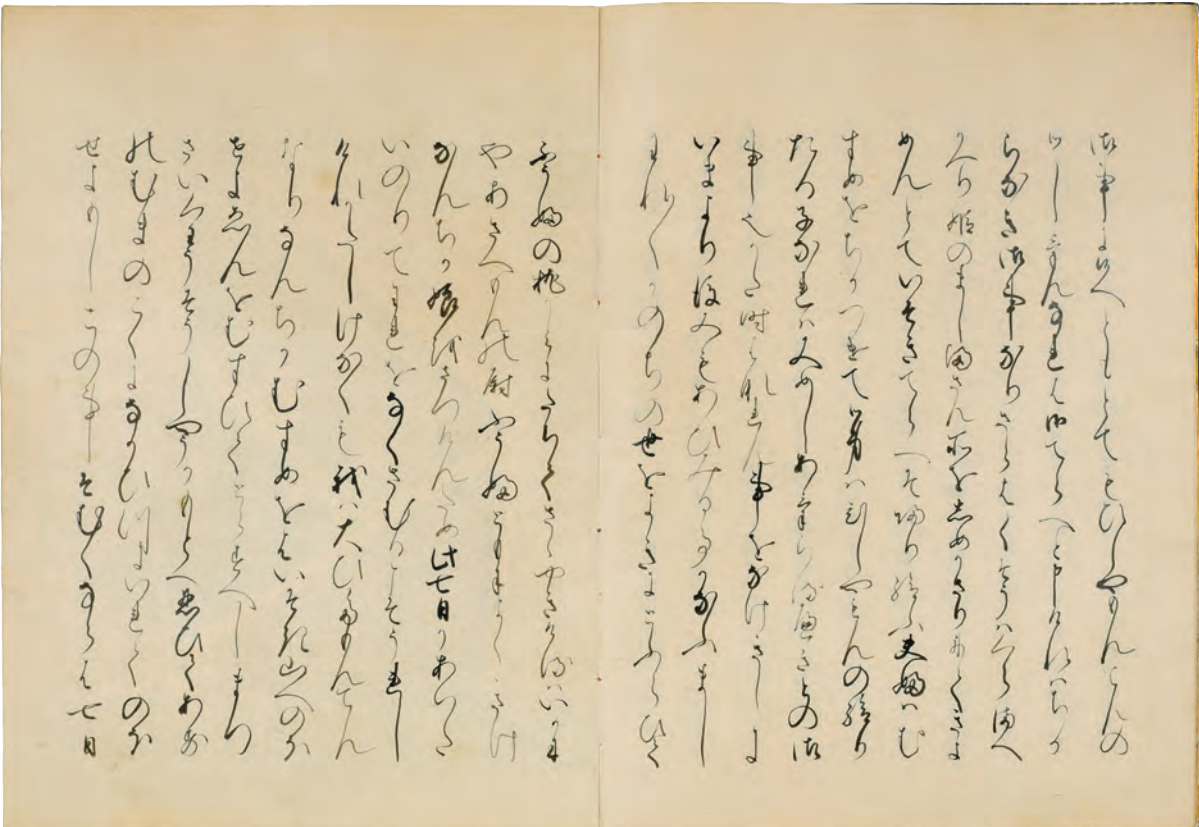
中冊 2丁表

中冊 1丁裏



中冊 3丁表 (6丁表)

中冊 2丁裏



中冊 4丁表

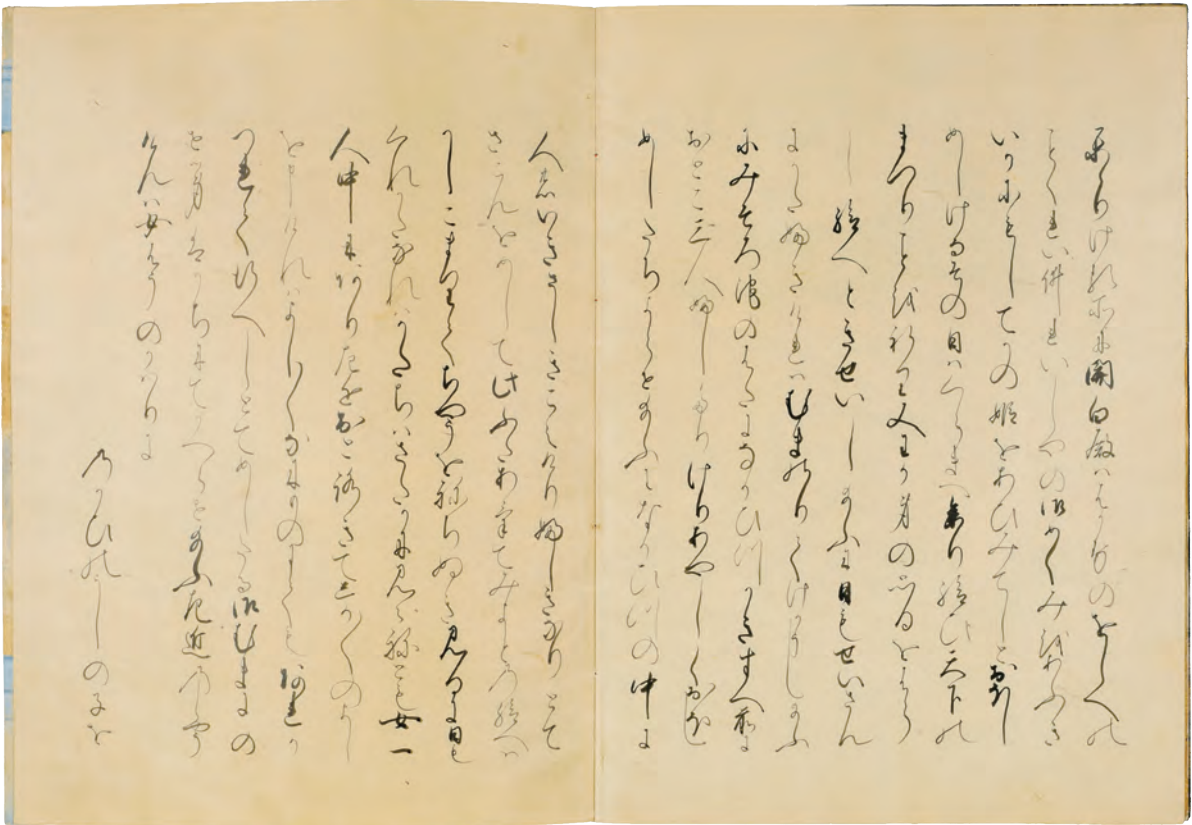
中冊 3丁裏 (6丁裏)

中冊 7丁表
 中冊 6丁裏 (3丁裏)



中冊 8丁表 奈良絵第二図

中冊 7丁裏

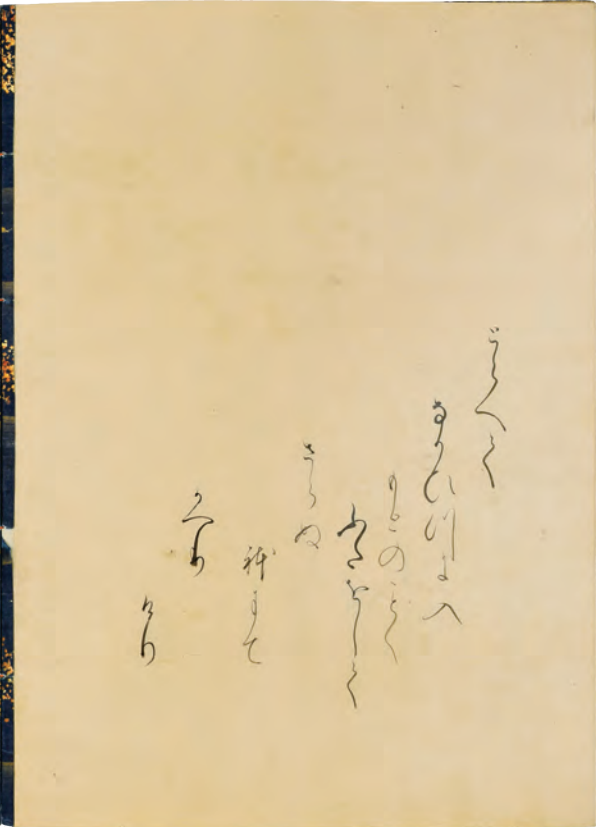


中冊 9丁表

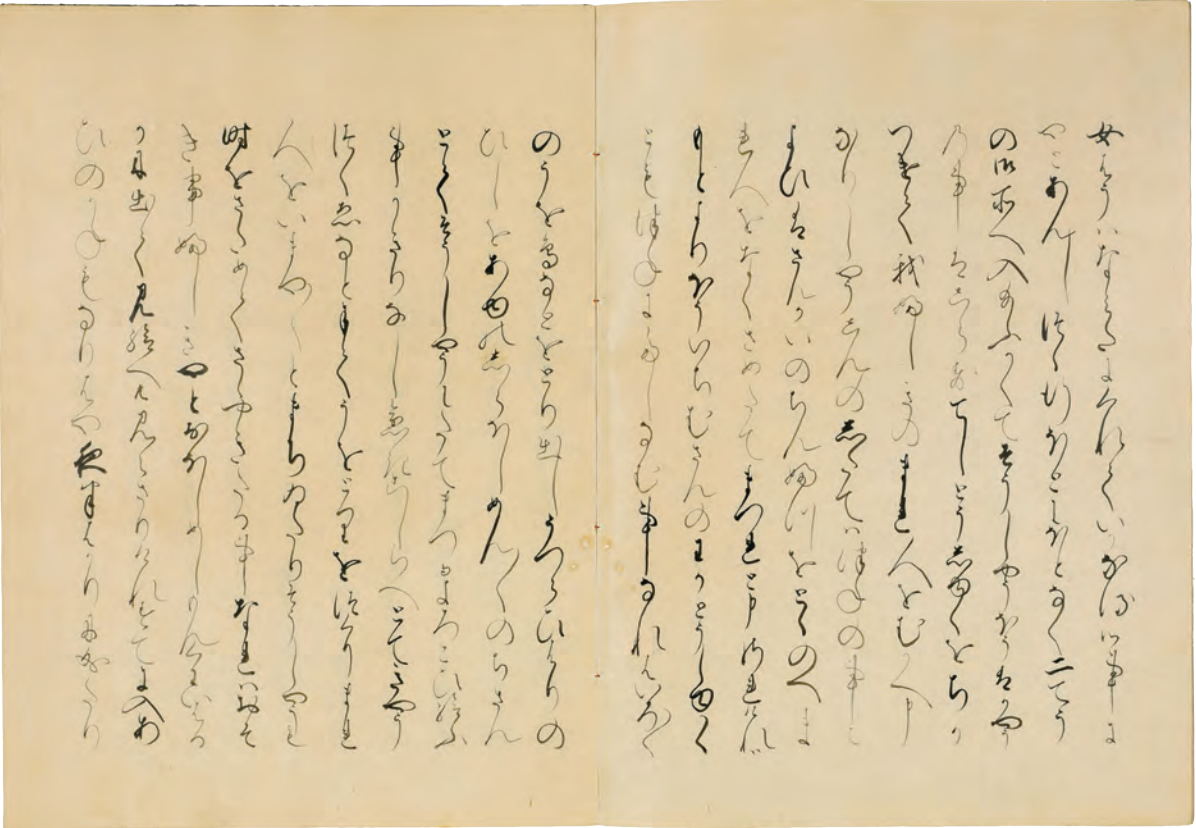
中冊 8丁裏



中冊 10丁表 奈良絵第三図

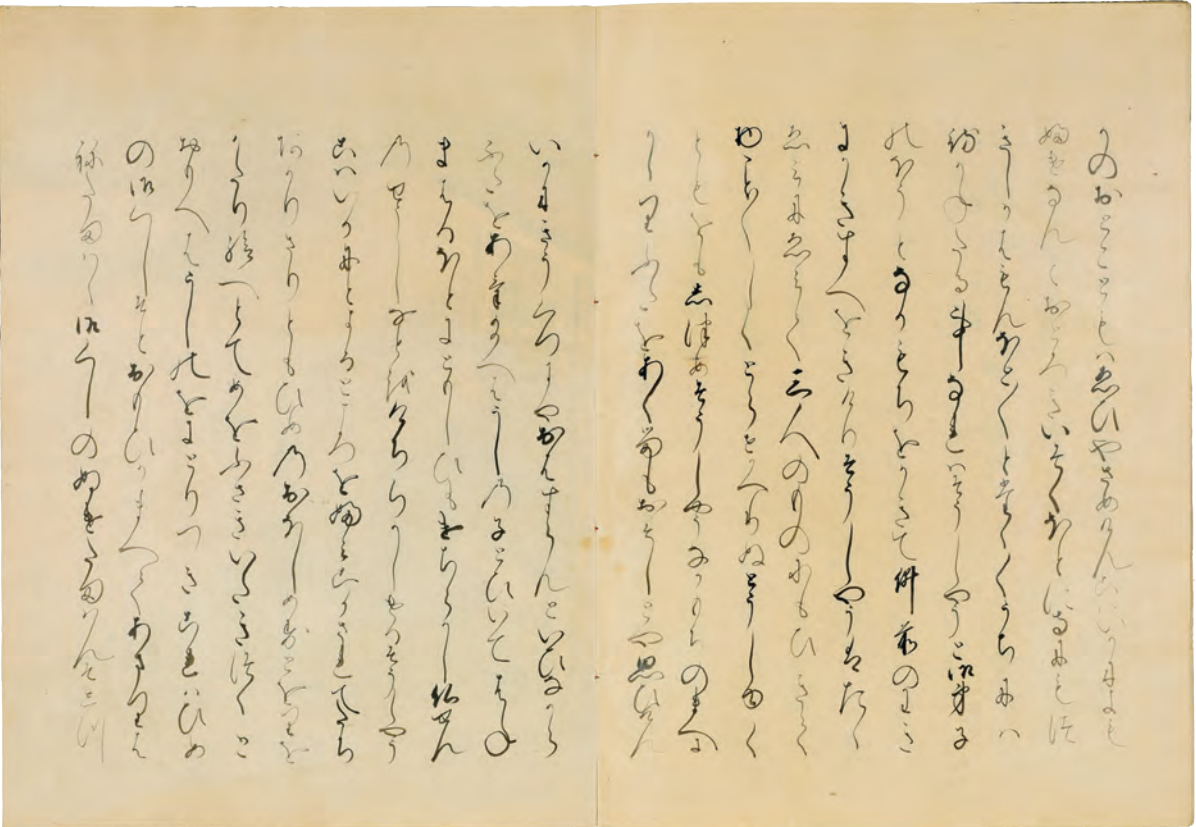


中冊 9丁裏



中冊 10丁裏

中冊 11丁表



中冊 11丁裏

中冊 12丁表



中冊 13丁表 奈良絵第四回

まろくくくくくくくくくく
 たりつとこ
 しんじり
 きりしやい
 しんじり
 たり

中冊 12丁裏

何れか...
 たりん...
 ねんじや...
 さん...
 し...
 こり...
 わり...
 ほか...
 子...
 り...

中冊 14丁表

中冊 13丁裏



中冊 15丁表 奈良絵第五図

ひきかきしやあまごがしいり
 さふきもつるおつとんじりあまご
 まくもあいらくのかんとじりあ
 さうまんとくくるまなりしり
 わるもとじりあんのうまごつてけ
 うしりとの船よなまもれりあ
 さまごつりあまごつり
 すすしやとみりあまごつて
 うらまごつりあまごつり

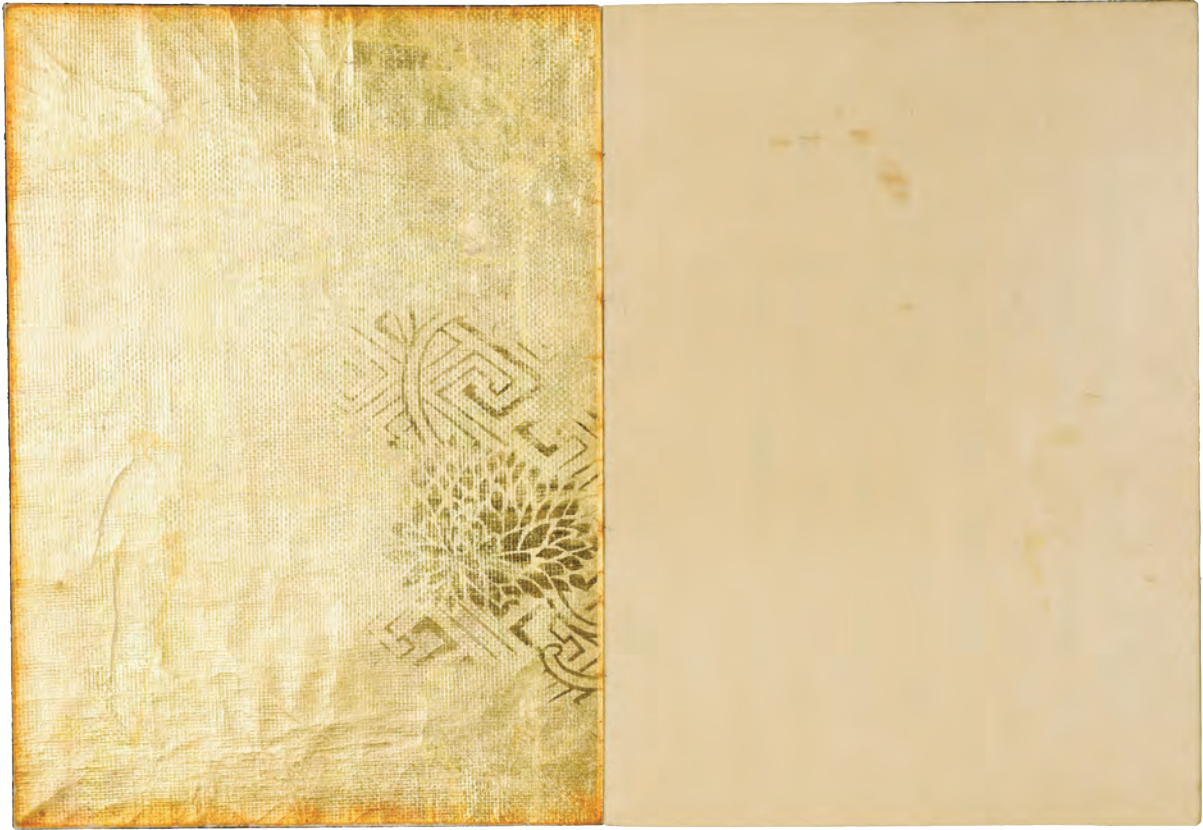
中冊 14丁裏



中冊 尾遊紙表

さいりあまごつりあまごつり
 なるいれ目あまごつりあまごつり
 しりあまごつりあまごつり
 あんとあまごつりあまごつり
 えさりあまごつりあまごつり
 うらあまごつりあまごつり
 せいの船よなまもれりあ
 わるもとじりあんのうまごつてけ
 かしりあ

中冊 15丁裏



中冊 裏表紙見返し

中冊 尾遊紙裏



中冊 裏表紙



さ
さ
や
き
竹

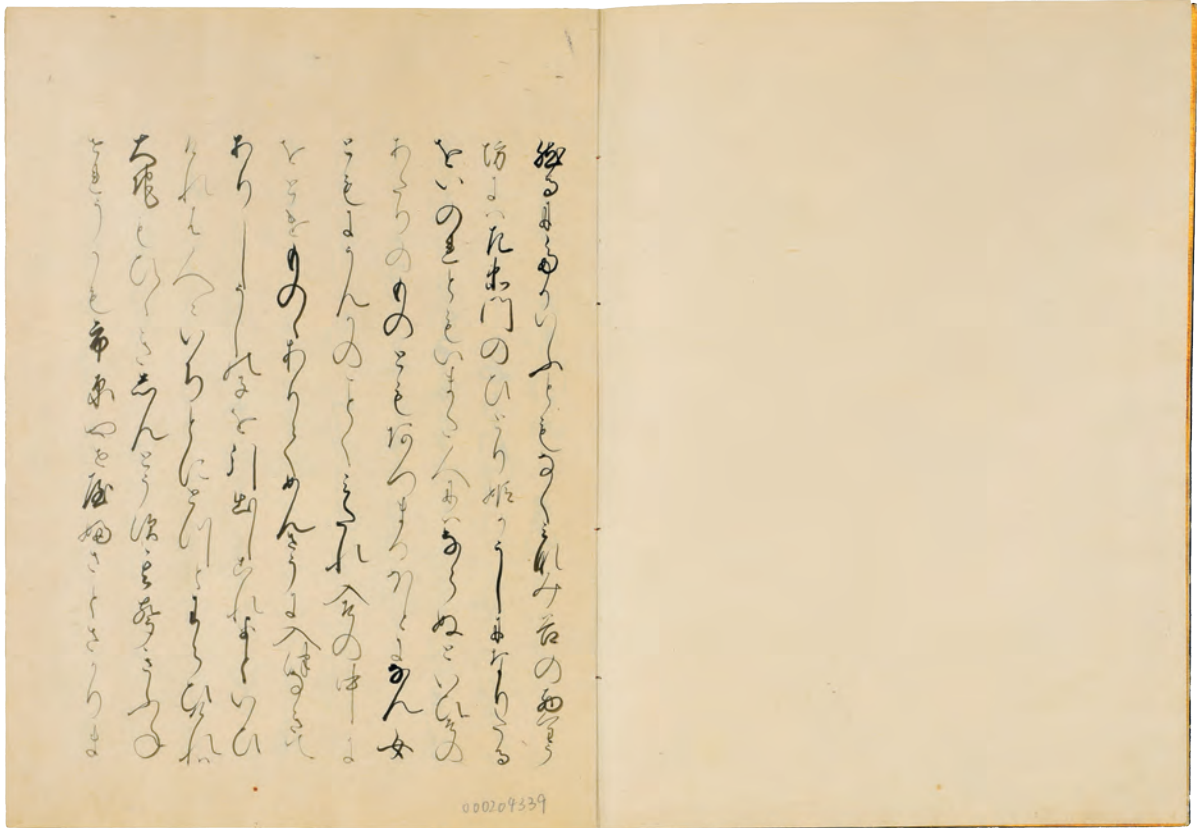
下

下冊 表表紙



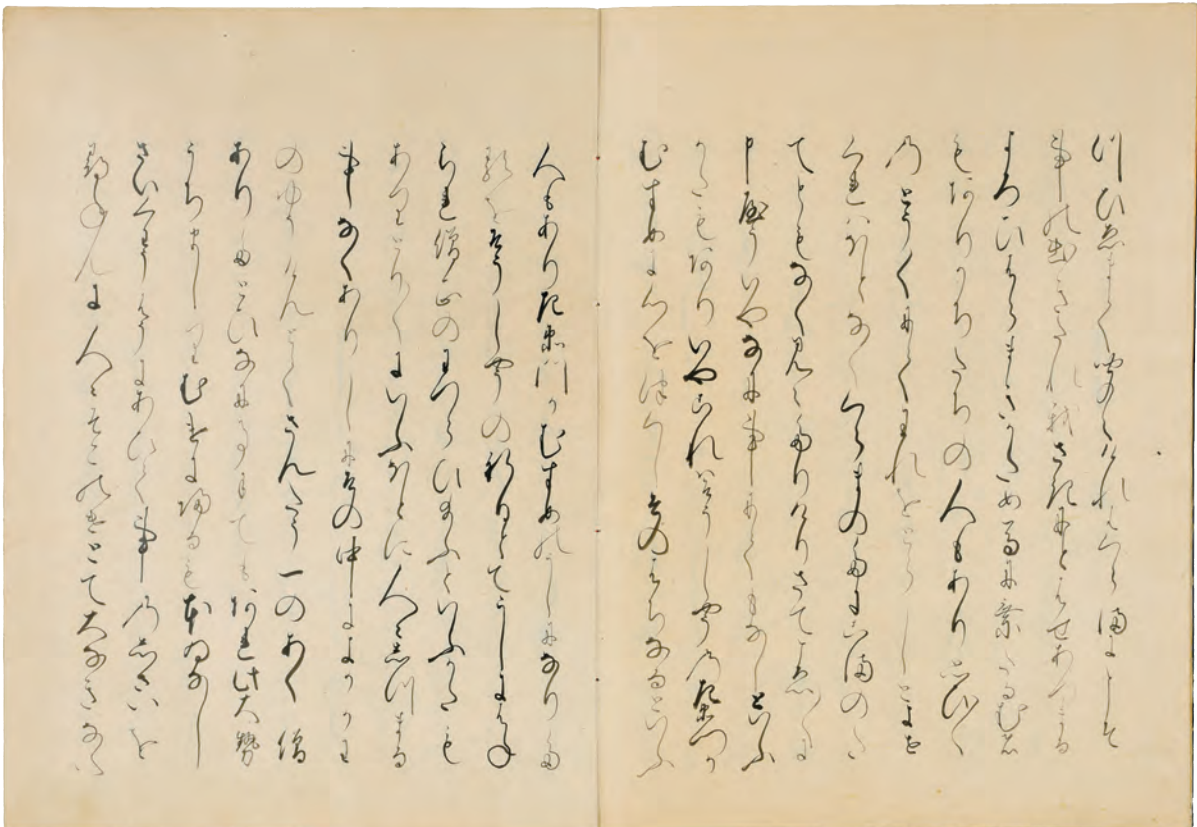
下冊 首遊紙表

下冊 表表紙見返し



下冊 1丁表

下冊 首遊紙裏



下冊 2丁表

下冊 1丁裏

りるわのて室白飯をくもゆいこのま
 れ中ののりいひいーとけりまぬ
 よらんとくさういーやんとあん
 とよこいひりーいーけんもく
 もあやんと大とまをさしてらん
 とれいーふあをさういーああ
 ーいーいーるんかひいーあうく
 十二いーいーひいーのうらさくまの井
 のんまよとゆいーいーいーたぬら
 志のまのーいーいーいーいーいーいー

下冊 6丁裏

風情いさしうはと筆おもひて
 とくふなさうるくくいーいーいー
 めんの海いーやうまいーいーいー
 ぐいーいーやり相をんく後にはわたり
 ういー歩あひいーあうすまれー
 月のの思いーいーいーいーいーいー
 まりのあをいーのありーいーあう
 ーいーいーあういーいーいーいーいー
 ついーいーいーいーいーいーいー
 ーいーの紫いーいーいーいーいー

下冊 7丁表

こあううまのたいもん大あれりー
 志るーいーりていーいーいーいー
 けいーいーいーいーいーいーいー
 ーいーいーいーいーいーいーいー
 いーいーいーいーいーいーいー
 ーいーいーいーいーいーいーいー
 ーいーいーいーいーいーいーいー
 ーいーいーいーいーいーいーいー
 ーいーいーいーいーいーいーいー
 ーいーいーいーいーいーいーいー

下冊 7丁裏

こりあーいーいーいーいーいー
 ーいーいーいーいーいーいー
 ーいーいーいーいーいーいー
 ーいーいーいーいーいーいー
 ーいーいーいーいーいーいー
 ーいーいーいーいーいーいー
 ーいーいーいーいーいーいー
 ーいーいーいーいーいーいー
 ーいーいーいーいーいーいー
 ーいーいーいーいーいーいー

下冊 8丁表

の人のうらみ一時もわらわの
 だういふあふれをうら
 ぬとのうらみ一時もわらわの
 白後まらうらみ一時もわらわの
 一時もわらわのうらみ一も
 一時もわらわのうらみ一も
 一時もわらわのうらみ一も
 一時もわらわのうらみ一も
 一時もわらわのうらみ一も
 一時もわらわのうらみ一も

下冊 8丁裏

いま何を
 ねん
 けりして
 めい
 一
 一

下冊 9丁表

さういらうらみ一時もわらわの
 をあつて今もわらわのうらみ一
 かつしてわらわのうらみ一も
 始とわらわのうらみ一も
 うらみ一もわらわのうらみ一も
 うらみ一もわらわのうらみ一も
 かつしてわらわのうらみ一も
 始とわらわのうらみ一も
 うらみ一もわらわのうらみ一も
 うらみ一もわらわのうらみ一も

下冊 10丁表



下冊 9丁裏 奈良絵第三図

下冊 11 丁表
 下冊 10 丁裏

下冊 12 丁表
 下冊 11 丁裏

あらうとつを好くうらまひし
 しんこひのしらべさうきうらまひのうら
 せんやりのせんしやりのい
 かりたのひものせんのかうせん
 かりたのせんしやりのすきせん
 とつてせんしやりのうらまひを
 うらまひたりせんしやりのせん
 もうらまひのせんしやりの十月
 とつてせんしやりのうらまひを
 うらまひせんしやりのうらまひを

のくみ

まうけ
 まうけ
 まうけ
 まうけ
 まうけ
 まうけ
 まうけ
 まうけ
 まうけ

下冊 13 丁表

下冊 12 丁裏

まうけのせんしやりのうらまひを
 うらまひせんしやりのうらまひを
 うらまひせんしやりのうらまひを
 うらまひせんしやりのうらまひを
 うらまひせんしやりのうらまひを
 うらまひせんしやりのうらまひを
 うらまひせんしやりのうらまひを
 うらまひせんしやりのうらまひを
 うらまひせんしやりのうらまひを
 うらまひせんしやりのうらまひを



下冊 14 丁表

下冊 13 丁裏 奈良絵第四図



下冊 裏表紙

附記 資料調査に際してご配慮戴き、影印と翻刻を許可してくださった
昭和女子大学図書館に深謝申し上げます。

(さいとう あきら 本学名誉教授)